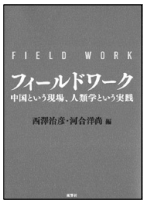
できることをする
——中国でフィールドワークすること

岩間　一弘

西澤治彦・河合洋尚編
フィールドワーク
中国という現場、
人類学という実践



A5判　554頁
風響社
［本体 3,600円 + 税］

本書は、日本を本拠地として中国を研究する文化人類学者を中心とし、数人の歴史学者・文学者も加わって、総勢二六人にも及ぶ老壮青の学者たちがそれぞれのフィールドワーク体験を語りつくした大著である。よく言われるように、図書館や文書館にこもって文献を探し集めて読みこむのが本業の歴史家に比べて、調査する実社会で試行錯誤して人間関係を築きながら話を聞いて考える文化人類学者のほうが、雑談していて楽しいことは多いのかもしれない。本書の面白さは、そうした経験談の迫力に由来するところが大きい。読者はまるでＴＶ番組の「情熱大陸」や「プロフェッショナル　仕事の流儀」を連続して見るかのように、しばしば息をのみながらページをめくり続けていくことになるだろう。

問題提起（西澤治彦）は、マリノフスキーらによって「考案」された「コミュニティ・スタディーズ」、すなわち村落に長期間住み込んで社会体系を総合的に捉えようとするフィールドワークが、人類学者にとって本来あるべきものとして意識されてきたことを指摘する。しかし本書では、多様なフィールドワークがあるべきということが「誰もが合意できる結論」（四六九頁）として示されていくことになる。

そして第一部では、「中国でどのようにフィールドを展開するか」という技術的・実践的な側面が扱われる。まずは、末成道男が一九六〇年代に台湾で行ったフィールドワークなどを振り返る巻頭エッセーを寄せ、末成氏を囲んだ座談会（瀬川晶久・桐本東太・西澤治彦）が収録されている。末成氏は、フィールドワークではキー・インフォーマントを見つけるこ

と、現地で出てきた問題を現地で育てることが必要であり、そして社会構造の核として家族・親族組織を見ることが依然重要であると述べる。そんな末成氏は、調査地で「透明人間」になっていた、すなわち、しっかりと観察をしながらも、相手の邪魔をせず、相手にも気にされていなかったという。

続いて、長沼さやか「「反復型」調査の有効性――広東省珠江デルタでのフィールドワークから」は、長期滞在型ではなく長い時間かけて短期調査を繰り返すフィールドワークの有効性を論じる。一〇年近く通い続けて調査地の人々と信頼関係を築くまでの過程で見えてきたという「共産党員や公務員に人前でお礼の品を手渡そうとするのはマナー違反」などの「中国社会のルール」が勉強になる。阿部朋恒「ハニ族の村で暮らす――現地適応型フィールドワークの技法」では、雲南省紅河ハニ族イ族自治州のある村落で二〇一三年四月から約二〇ヶ月にわたって住み込み調査した経験などが語られる。全身をダニ・ノミ・ネズミに喰われ歩くのにも難儀したこと、村の男たちと日々の営みをともにしながらメモや写真撮影を行う体力的な過酷さなど、想像を絶するものがある。奈良雅史「「宗教」をはみ出す――雲南のムスリムのなかでのフィールドワーク」は、昆明市のモスクに通い続け、非ムスリムとして出来る範囲でイスラームを実践しながら、モスク以外のインフォーマルな活動や昆明市の外での活動にも調査範囲を広げて、ときに「準ムスリム」と呼ばれるようにまでなった経緯を述べる。その過程で、ムスリムの宗教実践の曖昧さに気づかされたという。小西賢吾「チベット族とボン教のフィールドワーク――縁をたぐり寄せ、できることをすること」では、四川省阿壩藏族羌族自治州で二〇〇五年から足かけ約八年、延べ約一年半かけて行われたフィールドワークが紹介される。京都大学・西南民族大学（成都）で結ばれたご縁からシャルコクに滞在でき、村の人々に混じって僧院の周りを巡拝することからボン教の実践の場に参与していったという。

さらに、田中孝枝「同僚として、調査者として――広州の会社でフィールドワークした「私の経験」」では、広州市の日系旅行会社において研修生としてフルタイムで仕事しながら「ビジネス・エスノグラフィー」の執筆を目指した経験が紹介されている。調査では「文化人類学の調査をしている」というよりも「観光を学んでいるコンサルタント」と言ったほうが話がスムーズに進んだ、ということは納得できる。丹羽明子「フィールドワークにおける協働関係――陝北農村に「日本の女」として暮らす」は、陝西省北部の農村で「剪紙」（切り紙）や「秧歌」（伝統歌舞）などの民俗芸

術を調査した経験が紹介されている。さらに、筆者自身が取材されて出演した現地テレビ局のドキュメンタリー番組や、福岡アジア美術館等で開催された剪紙の展覧会をめぐって、調査者と調査協力者との関係性や協働に関する省察がなされている。梶丸岳「貴州省で山歌と出会う――出来事指向のフィールドワーク」は、掛け合い歌の「山歌」のなかで特にプイ語で歌われる「プイ歌」に関する調査の経験が述べられている。貴州省羅甸県での長期の住み込み調査が成果少なく終わると、山歌という出来事から出発し、山歌の場で繰り広げられるやりとりを徹底的に見てその中身を探るとともに、それがもつ広がりをたどる旅をする、という新たなフィールドワークを目指すことになったという。第一部の終わりには、中国の沿海部で長期の住み込み調査をしてきた若手の文化人類学者たちによる「座談会　現代中国におけるフィールドワークの実践」（稲澤努・藤野陽平・横田浩一・小林宏至・兼城糸絵・川瀬由高・河合洋尚）が収録されている。調査地への入り方、調査地でのアクシデントの回避方法などが具体的に語り合われている。

第二部では、「フィールドを通してどのように中国社会を解読するか」について、フィールドワーク体験を交えながら議論されている。まずは田仲一成が、中国の地方劇・祭祀演劇史の研究にとってエスニック・グループの視点が不可欠であるが、中国の地方誌がそれを無視して編纂されてきたと論じる巻頭エッセーを寄せ、その田仲氏を囲んだインタビュー（瀬川晶久・西澤治彦）が収録されている。圧巻のインタビューの内容は、一九七〇年代後半の香港における人類学者との出会い、地方演劇に関するユニークな所見、文献とフィールドとの関係など多岐に及んでいる。例えば、経済的に豊かで宗族が発達した江南などでは家族劇が多くなり、その逆だと京劇のように戦争の話が多くなる。都市芸能のルーツは農村祭祀にあり、中国の都市は農村の集合体である。文献を読むことは他人の「フィールド・ノート」をたくさん読むのと同じことである。文献は総論、フィールドは各論で、各論から入っても総論を疎かにしてはならないなど、数多くの興味深い論点が示されている。

続いて、佐々木衛「中国社会のフィールドワークの可能性――華北地域における共同研究の経験から」は、中国の研究者との共同調査で実施されてきた社会人類学のフィールドワークを振り返り、フィールドを把握するまで少なくとも四～五年の継続的訪問が必要であり、フィールドでの立ち振る舞いや接し方を全般的に教えてくれるインフォーマントに出会うのが重要であることと強調している。田村

和彦「「調査」と「フィールドワーク」を巡る考察――陝西の農村および都市での経験から」は、一九九九年から続ける陝西省でのフィールドワークを踏まえて、一度長期の滞在を経た地域に継続的・定期的に訪問する「通い続けるフィールドワーク」の有用性を強調する。中国で主流である上級機関の許可を受けて行う集団面接形式の調査は、村人の発言が幹部に訂正されるなどの問題があるという。川口幸大「住み込みと継続的なフィールドワーク――広東省珠江デルタにおける経験から」は、二〇〇〇年から約一五年間続けたフィールドワークから、豊かなのにも関わらず宗族が復興しない村は二つの行政単位に分断されていたこと、人々は宗族との関係よりも日々の祈り、年中行事、人生の節目において儀礼に関わることが多かったこと、そして豊かな海外と貧しい僑郷という関係性が変化してきていることなどを見い出している。さらに、河合洋尚「都市調査とマルチサイト民族誌――広東省を中心として」は、試行錯誤の結果たどりついた「サイト」（特定の場、対話集団）に焦点をあてるフィールドワークの方法を提唱している。客家の根拠地として知られる梅州の都市部での住み込み調査に失敗した後、広州市内の大型公園でおしゃべりなどをする地元のグループと知り合いになり、そこでの話題から調査するテーマ（景観再生など）、対象（地元政府など）、地域（省外・国外）を広げていったという。劉正愛「自社会人類学のフィールドワーク論――中国の経験から」は、中国人人類学者による自社会の研究、すなわち、東北生まれの朝鮮族である著者が満族を調査することの意味を考察している。福建省の満族村を調査した際、日本留学中であったことから「スパイ」扱いされたショックは、心中察すると心苦しい。佐藤仁史「歴史学者の行うフィールドワーク――江南地域社会史調査の場合」は、二〇〇四年から実施されてきた太湖流域社会史研究班による現地調査の経験などを踏まえて、現地での経験によって新たな着想から文献史料を読み込めるようになることを具体的に示している。西澤治彦「フィールドと文献研究の狭間で――江蘇省における調査経験から」では、一九八〇年代後半の南京大学留学時代を中心とした若き日の筆者の現地調査体験がいきいきと語られ、さらに限られた時間をどのように配分してフィールドワーク・文献研究・論文執筆を行うべきかという悩ましさも吐露されている。

本書の最後は「総合討論会　中国におけるフィールドワークと人類学の可能性」（瀬川昌久・聶莉莉・菊池秀明・河合洋尚・西澤治彦）で締めくくられる。本書の原稿をすべて読んだ参加者たちの議論は白熱しており、せっかちな読者はまずここ

から読んでみるというのも一興かもしれない。一部を列挙すれば、人類学か中国研究かという研究目的の二つの方向性、フィールドワークの開始時期が一九九〇年代以前か以降かで分かれる「世代の相違」、ミクロなところから積み上げていく人類学や歴史学にとって全体性の回復が課題であること、そして人類学者が長期の参与観察のなかで問いを創造していくことなどが、鋭い言葉で討論されている。

以上のように、中国におけるフィールドワークの経験知が一冊の書物に凝縮され、日本の研究者の間で共有される意義はきわめて大きい。門外漢が本書を読めば、中国を研究対象とする文化人類学者たちのフィールドワークにかける情熱と執念に、まずは驚き圧倒されるだろう。評者などは、これまで大都市の図書館・文書館で史料を探し集め、上海や東京の外食・食品関連業者におそるおそる「取材」をさせていただくのが精いっぱいだったが、本書を読むと自分の至らなさに多々気づかされて、恥ずかしい思いになった。しかし同時に、本書の随所に散らばる「不器用なフィールドワーカー」（九四頁）、「フィールドワークは決して効率の良いものではなく、むしろまわり道の連続」（九七頁）といった実直な言葉や、数多く語られるしくじりと挫折、そして試行錯誤の末の一定の成果には大いに勇気を与えられた。

ただし、評者の務めとしてあえて無い物ねだりをさせていただくならば、本書の議論は、中国を研究する日本の文化人類学者の得意分野を反映して、メディアや大衆文化よりも日常的な生活文化、近代以降に勃興した国際都市のモダン文化よりも近世以来の儀礼・祭祀を始めとする民俗文化、そしてナショナリズムやグローバリズムよりもエスニック・グループにより多くの関心を集中させている。文化人類学が世界史のように「人類の全体像を見る」（五二四頁）ことを目指すのならば、フィールドワークの対象や方法はより一層柔軟に広げられていく余地があるのだろう。

本書を読んで、フィールドワークは何か特定の形や決まり事があるわけではなく、情熱と常識さえあれば誰もが何かしら「できること」があるように思えた。さらに、フィールドワークと文献研究は二者択一のものではなく、どちらにどれだけ重きを置いて行うかという相互補完的な研究方法であることも再認識できた。そうだとすれば、本書はこれから中国でフィールドワークを始めようとする文化人類学専攻の大学院生ばかりでなく、リアリティのある社会描写を追求するすべての中国研究者にとって貴重な参考書になるだろう。

（いわま・かずひろ　慶應義塾大学）